

第16回 ちゅうでん教育振興助成（平成28年度）

報告書資料 一般 - 04

学校名・団体名	小学校演劇教育研究会
HPアドレス	なし
コース	教育研究
活動・研究 テーマ	表現活動を生かした防災力を高める授業実践
<p>〈活動・研究の意義、目的〉</p> <p>○防災教育を形式的なものから機能的なものにするために、演劇という手段を用いて、一人一人に確かな防災意識をもたせる。また、同時に「豊かな表現力」を身に付けさせる。</p> <p>○演劇を通して、先人の教訓や被災地の現状を知ることによって、これまで幾度となく災害を乗り越えてきた努力や力強さ、逞しさを生き生きと感じさせる。</p> <p>○繰り返し使ってもらえる台本を創り上げることで、地域の防災力の向上に貢献する。</p>	

### 《主な活動内容》

#### (1) 資料収集活動について

##### ①現地視察 (2月10日~12日)

被災地の現状や復興状況を知るために、現地視察を行った。

- ・現地の視察を行ったことで、被災地の今を知ること、また、脚本作りの際のバックグラウンドを知ることができた。また、視察の際に現地の団体との交流の機会を得て、被災地の状況やそれを伝えていく側の思いを知ることができた。



これらの写真は、バック絵等の素材として今後生かしていきたいと考えている。

##### ②地域民話等に伝わる防災について

災害に関する民話は多く残されており、その中には「先人の知恵」が盛り込まれている。これらを演劇の台本に取り入れることにより、教訓を演じる者が自然に身に付けることができると考えられる。また、東北地方では、東日本大震災の教訓を民話として後世に伝えようとする動きもある。NPO 団体が中心となり、子どもたちがアイデアを出しながら「現代民話」として創作活動が行われていることもわかった。

(取り入れたい民話例)

『稲むらの火』・・・津波に対する適切な避難のしかたや、自分だけではなく稲村に火を付けることでより多くの人を助けることができた部分が先人の知恵といえる。また、復興まで描かれていることにより、人々の絆や災害に立ち向かう勇気も学ぶことができる。

『みちびき地蔵』・・・地震が起きた後ではなく、潮干狩りをしていると急に津波が襲ってくることから、様々な状況で津波が起こることを想定しなければならないことがわかる。

- ・これからも民話については、書籍などを探しながら調査を進めていくが、当会としては『稲むらの火』をベースにして、脚本作りに着手していきたいと考えている。

#### (2) 演劇ワークショップの開催

- ・演劇ワークショップの開催に向けて、9月ごろから部内研修を進めた。その中で、富良野塾の元塾生をお招きし、表現力を豊かにするための指導をについて研修してきた。その後、12月17日(土)に、『演劇を通して防災を学ぼう』と題して、ワークショップを開催するに至った。内容は、3年間にわたり東日本大震災の被災地を訪れ、防災について広く啓蒙してこられた川崎理恵教諭による「東北大震災から学ぶこと～防災意識と表現活動～」と題した記念講演、また、「演劇づくりに生きる表現活動と指導法のあり方」と題した表現力ワークショップを行った。最後に、参加者による交流会をもつことで、幅広く忌憚のないご意見をもらうことができ、今後の活動において大変有意義なものとなった。

#### (3) 成果と課題

東日本大震災から6年が経過しようとしている今、被災地に関する報道などは少なくなってきた。今回、実際に被災地を訪れ、その景色やそこに暮らす人々を目の当たりにし、震災を風化させてはいけないという気持ちを改めてもつことができた。

北海道やその他の地域でも防災に対する危機意識は高まっているものの、現地との意識の差があることは否めない。学校現場でも、地震等の災害に対する非難訓練等を行っているが、喫緊の課題としては捉えられていない感がある。そのような中で、演劇を通して防災意識を高める本研究会の活動は、震災を忘れないこと、自分事として災害を捉えることとして有効であると考えられる。

今年度、収集した資料や経験をもとにして、来年度は実際に脚本作りに着手していく。その際に、震災を経験していなかったり、当時の様子を知らなかったりする子どもたちが、真剣に取り組むことのできる脚本にしていくのが今後の課題である。そのために、今回の視察で見聞きしたことを、脚本のバックグラウンドに盛り込んでいきたい。また、ワークショップで得た、表現力のアクティビティが学校現場の子どもたちに生かされていくよう、会員の知恵を集めながら取り組んでいきたいので、次年度も助成を賜うことができるように切に願っております。